

創建

そうこん

巻頭言：森山修治・1

オープンデスクで建築事務所の仕事を知る・2

第25回 JIA 東北建築学生賞応募作品・3

研究発表/教室ニュース・4

2021・11・20 VOL. 56 NO. 2 (通巻 178 号)

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

はじめに

高校時代に好きな科目の一つが世界史だった。もっとも、お世辞にも良いとは言えない成績であった。世界史の授業の面白さは教科書を通して魅力的な人物に出会えることだった。教科書のなかで魅力的な人物を見つけると勉強そっちのけで、その人物について詳細に調べていた。今まで興味を持った人物のうち、好敵手として戦った古代ローマ時代のハンニバルとスキピオの2人、中世ヨーロッパ時代のヴァレンシュタインとグスタフ・アドルフの2人をそれぞれ簡単に紹介して、得られる教訓的な感想も述べてみたい。

ハンニバル (BC247-BC183)

ハンニバル・バルカは、カルタゴ(アフリカ北部の海洋国家)の将軍である。第二次ポエニ戦争で、幾度となくローマを破り、一時はイタリア半島の大部分を攻略しローマを滅亡寸前まで追い詰めた。ローマ軍の意表を突くために数万の軍勢と数十頭の象を率いて初冬のアルプス山脈を越えてイタリア半島に攻め入ったことでも有名である。ハンニバルの目的は、都市国家ローマと周辺の都市国家群との分断を図ることであったが、ローマと各都市国家の絆は固くそれには失敗した。最終的にはスキピオ率いるローマ連合軍に屈することになる。さらに母国カルタゴにも見捨てられ、故国も追われたハンニバルはシリアに亡命し、カルタゴもローマに滅ぼされた。教訓としては、力の差がある相手に対して正面から喧嘩を売ってはいけないということであろうか。この事例では20世紀にアメリカに宣戦布告した日本を思い出し、余談として、ハンニバルはローマ史上最強の敵として後世まで語り伝えられており、イタリアでは最近まで子供が悪いことをすると“ハンニバルに連れていかれるよ!”と言って叱っていたらしい。

スキピオ (BC236-BC183)

プブリウス・コルネリウス・スキピオ・アフリカヌス・マイヨルは共和制ローマの政治家であり、ハンニバルを破った将軍である。スキピオはハンニバルの戦術を徹底的に研究しており、戦術もハンニバルの模倣であった。スキピオの勝因は、カルタゴの同盟国であるヌミディア王国(アフリカ北部)をローマ側に寝返らせたことであり、ハンニバルの切り札であったヌミディア騎兵を使ってハンニバルを破っている。教訓としては、得意技は相手にも研究され真似される可能性が高いということである。特に力の差の大きい相手に真似されると逆に弱点となる。得意技は常に研鑽し改良を続けなければすぐに通用

歴史上の人物から

得られる教訓

教授 森山 修治

しなくなる。情報や映像が簡単に入手できる現在ではなおさらである。

ヴァレンシュタイン (1583-1634)

アルブレヒト・ヴェンツェル・オイゼービウス・フォン・ヴァレンシュタインは、最大の宗教戦争といわれるドイツ30年戦争で活躍した傭兵隊長である。筆者の高校の教科書には“名将”とあり、三国志にてでくる諸葛孔明のように、もの静かで高潔な人物であろうと興味を持ったが、実際は想像と違った。ヴァレンシュタインはボヘミアの小貴族の生まれで、数万のならず者を集めて軍隊を組織し諸侯や有力者に金で雇われる傭兵隊長であった。ドイツ30年戦争では、カトリックの神聖ローマ皇帝に雇われてプロテスタント反乱勢力をドイツから駆逐した。その功績

で巨万の富を得たものの、恩賞にこだわる強欲さや急激な出世をねたまれて、すぐに失脚した。その後、“北方の獅子”とよばれたスウェーデン王グスタフ・アドルフがプロテスタント側として参戦すると、一気にカトリック側が不利となり、ヴァレンシュタインは国王や貴族に呼び戻された。ヴァレンシュタインはグスタフ・アドルフ軍に敗れたが、その戦いでグスタフ・アドルフは戦死した。それによりカトリック側の危機は去り、用済みとなったヴァレンシュタインは暗殺された。教訓としては、身の丈を知ることであろうか。出る杭は打たれるという。周りの様子を伺ってばかりでは何もできないが、自分の立場や周りの感情を見極めることも大事である。

グスタフ・アドルフ (1594-1632)

フィンランドやポーランドの一部を含む広大な領土を獲得したスウェーデン王である。よく訓練された軍隊と卓越した戦術で“北方の獅子”と呼ばれ、各国から恐れられた。内政を充実させ政治力・外交力にも優れていた。ただ、常に陣頭にたった指揮により何度も瀕死の目にあっている。ドイツ30年戦争にプロテスタント国として参戦し一時はカトリック側を敗北寸前まで追い詰めた。ヴァレンシュタイン指揮の軍隊も敗走させているが、その戦いで戦死している。原因は前線で指揮を執るうちに、誤って、退却するヴァレンシュタイン軍に紛れ込んだためである。極度の近視だったといわれている。教訓としては、味方を鼓舞し状況に即した判断をするには陣頭指揮が適しているが、後方から冷静に全体を見渡すことも必要ということであろうか。リーダーを欠いては戦略自体が崩壊する。

最大の教訓

現在の日本では、大抵の失敗では命までは取られない。気楽に大胆に課題と仕事に挑みましょう!

特集 オープンデスクで建築事務所の仕事を知る

オープンデスクとは何か

オープンデスクとは、学外の企業等において実施される「就業体験」です(似た言葉にインターンシップがありますが、こちらも「就業体験」という意味で使用されます。要するに、あまり違いがありません)。オープンデスクという言葉から連想されるように、仕事場を開放して学生に実務の場を見てもらおう、というニュアンスがあるようです。一方で、実際はオープンデスクも様々で、期間が数日程度の場合もあれば、一ヶ月以上に及ぶ場合もあります。また、簡単な作業を体験する程度の内容もあれば、本格的に業務の一端を担うこともあります。

建築の業界において、オープンデスクはいわゆる設計事務所で行われる場合が多いです。ウェブサイトなどを見てみると、オープンデスクを募集する案内が掲載されている例があります。また、友人や先生の紹介でオープンデスクの受け入れ先を見つけることもあります。設計事務所のオープンデスクでは、模型を作ったりパースを描いたりする業務を体験することが一般的です。中には、打ち合わせに同席したり、現場に同行したり、より実践的な業務を経験することができる場合もあります。

オープンデスクの紹介

令和3年の夏期休業期間を利用して、2年次生の学生3名が三つの設計事務所でオープンデスクを経験しました。いずれの学生も「事務所の様子を実際に見てみたい」という動機があるようです。大学では体験し得ない実務の現場で行われている何か、を求めてオープンデスクに参加しています。

前原尚貴建築設計事務所

本間しおりさんは、三日間の日程でオープンデスクに参加しました。事務所の様子を見てみたいということを教員に相談したところ、前原さんの事務所を紹介されたそうです。パソコンに向かって仕事をする前原さんの近くで、パースの線画に彩色を行いました。更には、住宅の設計を依頼した施主との打ち合わせに同行させてもらったとのことです。

前原さんに学生の印象をお伺いすると、「共通する傾向は真面目」という回答がありました。オープンデスクに参加しようと思う学生ですから、勉強したいという意識は高いでしょう。そのような態度から、建築や仕事に対する向き合い方も不ずと誠実になっていくようです。



中山建築研究所

板垣陽斗君は、一ヶ月以上の長期にわたって事務所に通っていました。高校生の頃から学校で教わっていた中山さんから声を掛けられて、毎年のように仕事場に入出入りしているそうです。もう一人の学生と二人で大きな模型の製作を任せられ、メ切に間に合わせるために連日の作業をしていました。請け負う公共建築の打ち合わせのため自治体で行われる会議や現場の検査にも同行するそうです。

中山さんをご自身が学生の頃に抱いた思いから、オープンデスクの学生を受けて入れているとのことでした。大学では得がたい刺激を求め、巨匠と呼ばれるような建築家の事務所を訪ね歩いたそうです。事務所を構え建築家となった今、現在の若者にも建築家を目指して欲しい、福島から世界に羽ばたくような活躍をして欲しい、そのような願いを込めて学生を受け入れています。



阿部直人建築研究所

宗像一樹君は、一ヶ月ほどの期間を通じて所員に混じって本格的に仕事をこなしていました。模型作りだけでなく、図面を描く機会もあり、見習いながらもスタッフさながらの扱いを受けていました。それだけに得るところも多くあるようで、教科書ではない実践的な図面を見ることが貴重な機会と感じているそうです。

阿部さんの事務所では、20年も前から学生を受け入れています。大学では体験できない実務の作業や現場の雰囲気味わって欲しい、という考えに基づいているそうです。一方で、個々に異なる学生のスキルを踏まえ、各々に適切なオープンデスクの内容を準備することは、相応に気を遣うとのことでした。また、オープンデスクには教育的な側面があることはもちろんですが、大前提として事務所では仕事をしなければならないということも挙げられます。学生にも事務所にも双方にメリットのあるものにしなければならない、とお話し下さいました。



第25回 JIA東北建築学生賞応募作品

JIA東北建築学生賞は(一社)日本建築家協会東北支部が主催する、東北地方の大学、高専、専門学校の建築学科に在籍する学生を対象としています。決まった課題が与えられるのではなく、各学校での授業課題として制作された作品で応募をすることが特徴です。本校からは例年、学内で選抜された4年生2名、3年生1名が出品をします。本年度は下記の3名の学生が選ばれ応募をしました。

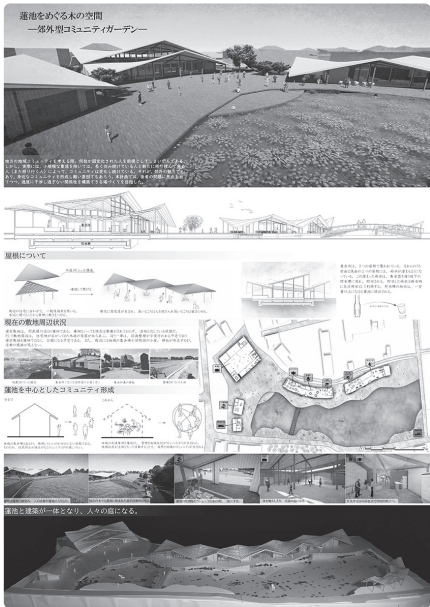
米山 俊也(4年)

蓮池をめぐる木の空間

——郊外型コミュニティガーデン——

地方の地域コミュニティを考える際、固定化された人を対象としてしまいがちである。しかし実際は、小規模な集落を除いて長く住み続けている人と新たに移り住んで来る人によって、コミュニティは変化し続けている。それが、郊外の魅力でもあり、親密なコミュニティを形成し難い要因でもあろう。本計

画では、過度に干渉し過ぎない関係性を構築できる場づくりを目指した。敷地は、住宅地にある放置されていた蓮池である。そこに集会所や消防団の小屋、神社など古くから地域の活動拠点と共に新しい機能を加えて再編したコミュニティガーデンを、地域の木材を使い、集落的造形、回遊性のある蓮池と通り抜けを意識し計画・設計した。本提案の蓮池がある土地を、空き地や公園等と捉えたと、どの郊外にも読み替えることができる。



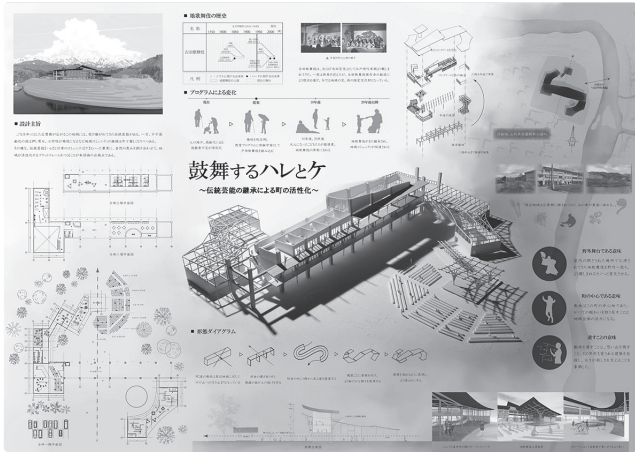
伊藤 響介(4年)

鼓舞するハレとケ

～伝統芸能の継承による町の活性化～

この地域には、受け継がれてきた伝統芸能が、また、ぶなを中心とした広葉樹が広がる、自然の豊かさがある。一方、少子高齢化の波は押し寄せ、小学校が廃校になるなど地域コミュニティの維持は難しくなりつつある。その様な、伝統芸能(ハレ)と日常のコミュニティ(ケ)といった要素に、自然の恵みを上手く掛

け合わせて、地域が活性化するプラットフォームをつくることが本計画の出発点である。具体的には、日常の地域コミュニティの核であり伝統芸能の継承の一翼も担っていた小学校の廃校舎と非日常な新しい舞台建築を、地域産木材を用いて融合させ、地域を鼓舞できればと考えた。また、敷地周辺の地域の原風景となる様な豊かな自然と相俟って、ハレでもケでも、何度も空間体験したくなる様な地域を象徴する建築空間づくりを目指した。



黒田 大翔(3年)

木の洞窟～自然と応答する建築～

計画地は大きなため池がある、豊かな自然が印象深い公園で、散歩道や桜の名所でも知られる市民の憩いの場である。この場所に私は、自然と建築が呼応する建築ミュージアム「木の洞窟」を提案する。

全体計画では、池からの景観と散歩道との連続性を意識した。計画建物の展示館・資料館は、公園

を歩く中で、次第に建築に引き込まれる空間体験ができるよう散歩道の延長上に配置した。また、人工物である建築には、水・光・木・風といった自然の要素を用い、内部空間に導いている。地域の「学び・交流・憩い」の拠点ともなるべきこの建築が、地域に新たな風景を創るだけでなく、豊かな自然と連続しながら違和感なく地域に溶け込ませることで、一般の人たちの建築への理解を促す。



研究発表／教室ニュース

学術論文

- 田中拓弥・齋藤俊克・出村克宣・掛川 勝、「塗布厚さの異なるポリマーセメントモルタル被覆によるコンクリートの中酸化抑制効果」、コンクリート工学年次論文集、Vol.43、No.1、pp.1007-1012、June 2021.
- 武田昌也・齋藤俊克・出村克宣、「ポーラスコンクリートの圧縮強度試験用供試体の載荷下端面へのアンボンドキャッピングの適用性の検討」、コンクリート工学年次論文集、Vol.43、No.1、pp.1013-1018、June 2021.
- 川崎浩長・大橋英紀・Henk JONKERS・Sanjay PAREEK、「微生物を利用した自己治癒コンクリートの最適な調合に関する実験的検討」、コンクリート工学年次論文集、Vol.43、No.1、pp.947-952、2021
- 川崎浩長・春木満・JONKERS Henk・PAREEK Sanjay、「バクテリアを用いた自己治癒コンクリートの最適な調合の決定に関する基礎的研究」、第75回セメント技術大会講演要旨、3301、pp.242-243、2021
- 川崎浩長・春木満・JONKERS Henk・PAREEK Sanjay、「バクテリアを用いた自己治癒コンクリートの最適な調合の決定に関する実験的検討」、日本建築

学会東北支部研究報告集構造系、第84号、pp.47-48、2021

- 川崎浩長・PAREEK Sanjay・春木満・JONKERS Henk、大橋英紀、「微生物を用いた自己治癒コンクリートの最適な配合に関する実験的検討」、令和3年度土木学会全国大会第76回年次学術講演会、V-137、2021
- 山田義文・浦部智義・飯村萌、「築年数が経つ劇場・ホール建築における運営の現状と課題に関する研究—郡山市民文化センターを対象とした住民調査と改修履歴に基づく分析—」、日本建築学会地域施設計画研究、Vol.39、No.63、pp.75-80、July 2021
- 宮崎渉・浦部智義・早川真介・影山大晃、「医療施設の本質化に関する研究—小児科診療所に着目して—」、日本建築学会地域施設計画研究、Vol.39、No.63、pp.197-202、July 2021
- 高橋岳志・速水清孝、「統計資料から見た中大規模CLT建築物に関する基礎的研究」、日本建築学会地域施設計画研究、Vol.39、No.63、pp.321-328、July 2021

2021年度日本建築学会大会(東海) | 会期: 2021年9月7日(火)~ 10日(金) | 会場: オンライン

- 公立美術館における友の会の実態に関する研究 福島県内の市立美術館を対象として.....○野口樹(日本大)・浦部智義
- 自治体が主催・共催する建築顕彰制度の顕彰目的の分析.....○小松大輝(日本大)・浦部智義
- 大船渡市の防火建築帯指定後の展開について.....○速水清孝
- 地域コミュニティの拠り所である祭り屋台の復元活動 須賀川市本町歌舞伎屋台について.....○市岡綾子
- 福島県内における道の駅の機能に関する研究.....○園田駿希(日本大)・宮崎渉
- 中世木割書にみられる鳥居の木割.....○山岸吉弘(日本大)
- 郡山市内におけるサービス付き高齢者向け住宅に関する研究 その2 入居者のニーズに見たサ高住の建築特性の分析.....○王健嬌(日本大)・山田義文
- バクテリアを添加したモルタルのひび割れ自己治癒性能に関する基礎的検討.....○川崎浩長(日本大)・Sanjay PAREEK
- ジオポリマー板材で補強した杉製材の曲げ剛性の定量評価に関する実験.....○鈴木裕介(大阪市立大)・谷口与史也・Sanjay PAREEK
- コンクリートの中酸化抑制効果に及ぼす被覆ポリマーセメントモルタルの塗布厚さの影響.....○田中拓弥(日本大)・齋藤俊克・出村克宣・掛川勝

学会発表

- 川崎浩長さん(バリエ研)が、3月5日に「2021年一般社団法人日本建築材料協会 優秀学生賞(大学院・大学の部)」を受賞した。
- 7月3日、狩野勝重元教授の宮城県石巻市の町並みに関する調査資料(保管: 速水研究室)が、一般社団法人ISHINOMAKI2.0主催の「生きつづける石巻のたてもの展」で展示された(会場: 旧観慶丸商店、会期: 7月19日まで)。
- 浦部智義教授(委員長)と宮崎渉専任講師は、7月5日に福島県木材協同組合連合会「福島県幼施設における木の良さ調査検討委員会」の委員を委嘱された。
- 浦部智義教授が、7月16日に福島県建築設計協同組合「伊達市旧小手小学校リノベーション工事業務委託」簡易公募型設計競技審査の審査委員長を委嘱された。
- 市岡綾子専任講師は、8月6日、田村市より田村市総合計画審議会委員を委嘱された。
- 奥山翔太さん(浦部研M1)のR2年度の卒業設計で取り組んだ作品「弱波堤—日常に寄り添う小さな堤—」が、第1回フェーズフリーアワード2021(アイデア部門)で入選(8月6日)、また、歴史的空間再編コンペティション2021で入選(10月14日)した。
- 齋藤俊克准教授、川崎浩長さん(バリエ研)、武田昌也さん(齋藤研)、田中拓弥さん(齋藤研)が、8月21日行われた日本大学校門建築会材料施工研究会第46回材料・施工研究講演会において研究発表された。
- 市岡綾子専任講師は、8月26日、須賀川市より須賀川市民交流センター運営協議会委員を再委嘱された。
- 市岡綾子専任講師は、白河市より9月6日・22日・10

月9日、景観学習事業の講師を依頼された。また、市岡研究室を中心とした学生有志が児童の学習支援を行った。

- 速水清孝教授は9月8日、日本建築学会賞(論文)受賞に伴い、日本建築学会大会にて受賞者記念講演を行った。
- 森山修治教授は9月8日、2021年度日本建築学会全国大会 防火部門研究協議会「歴史的建造物の防火対策はどうあるべきか」にパネラーとして参加し、「大規模木造宿泊施設の防災評価」という題名で講演された。
- 奥山翔太さん・竹井諒さん(共に浦部研M1)・山口和紀さん(浦部研4年)が、三菱地所設計設立20周年特別企画「+ミライプロジェクト」学生コンペ: 募集テーマ「目抜き通り—そして、そこにたつ建物」に、作品「野馬追通り—まちを育てる馬と共生する暮らし—」を応募し、9月6日に東北エリア次点(優秀賞)に選出された。
- 浦部智義教授と浦部研究室が建築・空間デザイン分野で応募した病院・医療関連施設「Smart Wellness Town PEP MOTOMACHI」が、9月26日にキッズデザイン賞優秀賞(少子化対策担当大臣賞)を受賞した。
- 10月1日、建築学科建築歴史意匠研究室・空間デザイン研究室・住環境計画研究室の学生が制作した前川國男「弘前市緑の相談所」(1980)の模型が「2021年度秋冬プログラム りんご前線—Hirosaki Encounters」展に展示された(会場: 弘前れんが倉庫美術館、会期: 2022年1月30日まで)。
- 「森林資源を生かし「木造都市ふくしま」を実現—木材利用をSDGsの視点で—」に関する、浦部智義教授と宮崎渉専任講師の言論が、10月8日付けの福

島建設工業新聞に掲載された。

- 浦部智義教授は、10月8日に富岡町「桜を活かしたまちづくり検討委員会」の委員を委嘱された。
- 高橋岳志助教が村上・AUM設計共同体(福島県建築設計協同組合)と協働し、プロポーザル、基本設計業務を担当、森山修治教授が設備設計監修をされた「南会津地方広域市町村圏組合・新消防庁舎(設計期間/2017-2018)」が10月8日、令和3年度木材利用優良施設コンクールにおいて、林野庁長官賞を受賞した。
- 市岡綾子専任講師と市岡研究室は、10月10日・30日、11月7日に矢吹町大池公園にて青空図書館を実施した。
- 森山修治教授は10月13日、公益財団法人文化財建造物保存技術協会より、第一次大極殿院復原建造物(平城京跡地)の防災計画等について指導を依頼され意見書を提出した。
- 森山修治教授は10月13日、国立研究開発法人建築研究所より研究評価委員会の委員を委嘱された。
- 森山修治教授は10月19日、竹生島奉賛会より竹生島内の国宝・文化財建造物の防火対策について指導を依頼され意見書を提出した。
- 森山修治教授は10月21日、福島市より福島市新学校給食センター整備運営事業検討委員会委員を委嘱された。
- 10月29日に行われた第25回JIA東北建築学生賞において、伊藤響介さん(浦部研4年)が、作品名「鼓舞するハレとケ—伝統芸能の継承による町の活性化—」で優秀賞を、米山俊也さん(浦部研4年)が、作品名「蓮池をめぐる木の空間—郊外型コミュニティガーデン—」で奨励賞を受賞した。

教室ニュース

編集後記: 創建は工学部建築学科の機関誌として、1966年4月11日に創刊しました。工学部図書館には、創刊号から100号までが合本され所蔵されています。建築学科の歴史を垣間見ることできる資料です。(高橋)

お願い: 編集室までご意見・ご感想をお寄せください。
ceb.soukon@nihon-u.ac.jp